# 始祖の竜神と平凡の僕。

夜月 朔

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界は竜神によって創造された。竜神は始祖として人々に崇め奉られる。様々な種族が住まうこの世界で竜神と僕は出会った。そしてそれは『必然』なのだと。

新たな仲間も加えつつ僕達は旅をする。その最中で水の女神の遺跡に寄る。そこでこの世界の神秘に触れた僕は隠された真実を知る事となる。

その後の翠竜との戦闘に引き分けだった僕達は、その六年後に翠竜討伐の為、国家転覆を巻き起こし長き宿命を終える。一息ついた僕達を襲うのは謎の魔法光であった――

---

この作品は「アルファポリス」「カクヨム」「小説家になろう」にて掲載しています。

https://kakuyomu.jp/works/1177354054888

557924

# 目次

1．僕は竜神と出会う ―――― 1
2．竜神による生き地獄 ―――― 6

# 1．僕は竜神と出会う

太古の昔。人々が誕生する前の話。この世界には竜がいたそうだ。今となっては人間が支配する世の中となってはいるが、当時は竜が世界を支配していた。

竜と言うと凶暴で凶悪なイメージ。それが第一印象かもしれない。だけど史実は違う。竜は知能が高く、真の平和を築いていた。

さてそんな太古の昔と今。何故このような話をしたのか。僕の前にはある一人（いったい）の竜がいるからだ。

「えーっと……。君は？」

「ずっと言ってる。私は竜神。太古の昔から世界を統べる存在。」

正直、傍から見ると危ない人だった。別に外見がという訳では無い。先程からも分かる通り発言が、だ。この手前にいる二十歳前ほどの女性は自らを竜神と名乗っている。

この世界において竜神は崇め奉られる唯一神であり、その名を汚す行為は不敬罪に値して打ち首からの晒し首となる。最大の辱めを受けた後、骨は遺族に届けられることは無い。それほど危険な事を目の前の女性はしている。

「……一旦、落ち着け僕。」

「……頭大丈夫？」
「あんたがだよ!!」
　やりきれない気持ちでいっぱいだった。どうすればこの女性におかえり願えるだろうか。ここは宿である。あまり大きな声は挙げられない。僕が不審者扱いだ。僕が止まっている宿なのに。目の前の女性が侵入者なのに。……はぁ。
「どうかしましたか？」
「あ、いえ！何でもないです！」
　案の定、宿屋の女将さんが来た。危なかった。今日は最低な日だな。はぁ。
「取り敢えずどうして僕の部屋に来たのか教えてくれる？」
「分かった。あなたを探してた。場所聞いた。入った。」
「どうやって宿屋の人にバレずに入れたの？」
「こうやった。」
　竜神と名乗る女性は椅子に座っていたが立ち上がった。そして手を翳すと女性の目の前の空間に人一人が通れる広さの穴が空いた。……亜空間。偉大な魔法使いしか使えないとされる亜空間魔法。超難関な魔法だ。僕も初めて見た。ということは……本当に竜神なのか？……いやいや、嘘だろう。こんな危ない人が竜神であってたまるものか。僕は知らず知らずの内に冷や汗をかいていた。

「僕は……逃げる!!」

僕は男として恥ずかしい。どうしてこんな選択を僕がしなければならないのか。普通ならばあちらさんがお帰りになる場面な筈なのに。僕、何も悪くないよね？

宿から飛び出た僕は一目散に街の外を目指した。僕が泊まっている宿屋は田舎の小さな街にある。静かな暮らしを求めた各地の仙人や大魔法使いが余生を楽しむ。そんな街だ。僕はこの街で生まれた訳では無いが、これと似たような街出身である。

こんな剣と魔法な世界だが、僕は剣術が優れている訳では無い。勿論、魔術が優れている訳でも無い。では他が優れているのか？そんな筈も無い。平凡な一般市民だ。竜神とか何とか、そんな事態に一般市民を巻き込まないで欲しいものだ。

街から出た僕は森に入った。時間帯は正午過ぎではあるが、森の中は薄暗い。当然の事ではあるが、魔物も出現する。僕は夢中のあまりにそれを懸念する事を忘れていた。だからこそ今、ピンチである。

前方には悪狼（イビルウルフ）。背後にはウッドゴーレム。右には月熊（ムーンベアー）。左には牙鼠（ファングマウス）がいた。どれも群れを成している。

この森には普段これほどの魔物は出現しない筈だ。どれもD級指定の僕の力では手に負えない魔物だ。この中で一番弱い牙鼠（ファングマウス）でさえも二十体以上いる。これは〈魔物騒動（モンスターフェスタ）〉である。魔物の大量出現の事を指す用語の事。僕ほどの実力であれば、

１００パーセント死ぬ。

だからと言って……だからと言ってここで諦めるのはとても愚かしい。最大限抵抗するのがこの世界の掟（ルール）だ。僕がそれを遵守する必要も無いが、ここではそれに乗っからせてもらうとしよう。

「【砕け散れ、爆散せよ】……【エクスプロージョン】ッ!!」

火魔法が一つ【爆散】の魔法。僕は最も弱い牙鼠（ファングマウス）の群れに対して魔法を発動した。広範囲の魔方陣が展開して、魔方陣の上にいた牙鼠（ファングマウス）が全て詠唱通りに爆散した。だが殲滅出来た訳では無い。後方に待機していた残りが一斉に襲ってきた。同時に他の魔物達も我先に、と襲ってきた。慌てて僕は結界魔法が一つ【防御】の魔法を発動する。

「【固く守れ、守護せよ】、【プロテクション】!!」

次は僕の下に魔方陣が展開。僕を取り囲むように光の防御の結界が張られた。これである程度の攻撃は防ぐ事が出来る。二つの上級魔法を発動したことで僕の魔力が残り僅かとなってしまった。次で決める。

「【焼き尽くせ、地獄の業火で、焼失せよ】……【インフェルノ】!!」

火魔法が一つ【業火】の魔法。先程までの上級魔法よりも高難度な魔法である至高魔法を発動した。視界に入る全ての魔物を焼き尽くしたようだ。これで大丈夫かな……。大分意識が遠のいてきた。魔力切れなようだ。そろそろ休も――――え？

視界に入る全ての魔物を倒したが、視界外の魔物がまだいたのだった。繁殖期が重なることで発生する魔物騒動（モンスターフェスタ）だが、今回のそれは異常なようだ。僕の【防御】もそろそろ魔力切れで解除されそうなのに……。僕は歯を食いしばった。ここで死ぬ訳にはいかない。そう易々と死んでたまるか。

「すー。はー。」

僕は一度深呼吸をする。そして両頬を叩き、気合を入れ直す。

「よし、いくぞ。……【響き渡れ、死の四重奏で、命を散らせ】――――」

そのまま意識が遠のいた。不可抗力だった。何故か猛烈な眠気が襲ってきたのだった。当然、魔力切れも近付いてはいたが、それは我慢すればギリギリ大丈夫であった。謎の眠気が僕の意識を刈り取ったのであった。

倒れた青年の前に一人の女性が立つ。そして奏でる。〈起源の魔法（オリジンマジック）〉である竜が使いし魔法……竜魔法を。

「……【変革せよ】【ワールドカスタマイズ】。」

竜神は世界を変える力を持っていた。

# 2．竜神による生き地獄

「【変革せよ】、【ワールドカスタマイズ】。」

竜神と名乗る女性は〈起源の魔法（オリジンマジック）〉である竜魔法を放つ。元来、太古の世界を支配していた竜族は竜魔法によって、万物に劣ることの無い力を所有していた。

その神ともなれば力は偉大なものである。竜神が使う竜魔法は他の竜族が使うものとは全く違う、まさしく世界を作り替える力があるのだ。

今、この女性が使った魔法は竜魔法が一つ【変革】だ。魔物騒動（モンスターフェスタ）を起こしていた各魔物がここに存在していないものとして世界の理を修正したのだ。これぞ竜神のなせる技である。

「……気絶してる。」

全ての魔物を文字通り消した後にようやく青年が気絶している事に気付く。先程の落ち着きようは何だったのか、焦ったように竜魔法が一つ【再生】を発動した。

「【再生せよ】、【レストレーション】。」

存在する全ての回復に関する魔法の中で最も最大の癒しを与えるこの魔法。傷や状態異常を治すだけでなく、呪い、痛み、不安。それに加えて眠気なども。万能回復魔法

なのだ。
　すぐに青年は目覚めた。それを見て、女性はようやく安堵する。
「ここは……あぁ……そういう事か。」
　青年は全てを悟った。この竜神と名乗る女性は自分を追い掛けてここまで来たのだと。そして魔物に囲まれて気絶しているのを見て助けたのだと。面目を潰さない為にも追い掛けることや攻撃することをギリギリまで耐えていたのだと。いや既に面目丸潰れなのだが。
「すまない……」
「大丈夫。」
　女性の返事は素っ気ないものだった。これぐらいはお節介の範疇のようだ。礼など有難迷惑だと言わんばかりに頬を膨らましている。姿は人間そっくりだ。とても竜神だとは思えない。
「あんたはホントに竜神なのか？」
「うん。正真正銘の竜神。」
　そう言うと少し胸を張る。程々の胸が強調されたが生憎と青年に胸好きな趣味は無かった。変わらずに青年は話を続ける。
「あんたは何のために僕を探しに来たんだ？」

今まではすらすらと答えていた竜神の女性は答えに詰まった。『運命』などという回答は辞めてほしいものだが……。
「ッ……ひ、必然？」
「はぁ……。」
予想の斜め上な回答が来たよ。まさか『必然』だとは。運命すらも超越してるじゃないか。自分から会いに来ておいてそれを『必然』と言ってのけるとはよほどの自信家……なのか？
「それで？」
「？」
可愛らしく首を傾げる。普段は無口で可愛い女性だとは青年も思っている。だがその発言についていけないだけなのだ。突拍子もない発言は辞めてほしい。
「それであんたは僕の名前を知ってるの？」
それだ。『必然』というからには名前を知っていて当然の筈だ。まさか……それはないよな？それだけは勘弁だぞ。
「し、知らない。」
「おいっ!!!……あぁ、すまん。」
思わず大きな声を出して、女性を驚かせてしまった。自分よ紳士であれ。スーハー

スーハー……よし。気を取り直して。
「ま、まあ取り敢えずあんたは僕に会いに来たんだよね。」
　質問に女性は慌てて頷く。脅威的な可愛さである。人を萌え死にさせそうだ……とか街の冒険者がよく言ってた気がする。……断じて僕は言っていない。
「じゃあ、僕に会って何をしたいの？」
「……………旅をしたい。」
「うん。もう一度頼むよ。」
　何故か左耳から右耳に言葉が流れ出てしまったようだ。まさか『旅』だなんて言ってないよね？恐る恐る女性を見る。女性も興味津々とでも言うように目を輝かせてこちらを見つめていた。
「旅。旅がしたいんですっ！」
「はぁぁぁぁぁあああああ!!!!」
　ここに一つ宣言をしておく。―――僕は旅が嫌いだ。とある出来事があってからは完全に旅を毛嫌いするようになってしまった。旅と聞くだけで身体中に蕁麻疹が出るのだ。数ケ月に一回、薬を処方してもらっているが、その言葉を聞いた時は塗った甲斐無く、蕁麻疹が出てしまう。僕の中では『旅』という言葉は『竜神』と自分を呼称するのと同じレベルの禁句である。

「ど、どうしてた……うっ……遠出をしたいんだい？」
「あなたとならこの世界を救えるから旅をしたいんです。」
何故この女性は『旅』を強調するんだ。辞めてくれ……。腕は……。あっ、既に蕁麻疹だらけだ。へ、ヘルプミー……。
「お願いします！世界の危機が掛かっているんです！」
「せ、世界の危機……？」
瀕死寸前の状態で青年は耐え続けた。青年は生き地獄という言葉を今日初めて実感したのであった。これが竜神の実力……恐るべし竜神……。当の本人……いや当の本竜は自己評価がグングンと減少しているとは知る筈も無かった。